
6人の霊使い

神風 疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6人の霊使い

【Nコード】

N5062N

【作者名】

神風 疾風

【あらすじ】

魔法族の里にある魔法学校に通う精霊使いの、エリア、アウス、ウイン、ヒーター、ダルク、ライナの6人は、明日の試験のために勉強会を開くことにしたが…

この作品に登場する霊使い達の性格は、作者のイメージです。また、オリキヤラが登場しますので、イメージを崩したくない方、オリキヤラが苦手な方は、ご注意ください。

なお、ぱすてるチャイムContinueのキャラは本編には出て

きませんので知らない方もお楽しみいただけます。

第一話『日常』（前書き）

どうも、こんにちは神風 疾風です。

今回書かせていただいたのは、遊戯王の二次創作で、霊使い達を主人公にしたものです。

ちなみに、自分には文才がないため、とんでもない駄文になってしまつと思われませんが、皆様に少しでも楽しんでいただけるように、頑張りますので、よろしく願います。

第一話『日常』

ここは、デュエルモンスターの世界のとある地域のとある場所。

「遂に、遂に完成したぞ。これで世界は、俺の物だ。行け！俺の計画のために、各地の有力者を捕らえてくるのだ。フハ、フハハ、フアツハハハハハハハハ。」

その笑い声は、暗く深い闇の中へ消え、世界の終わりへのカウントダウンが始まった。

キーンコーンカーンコーン

「はい。では今日の授業はここまでにします。明日は、憑依装着の実技試験を行いますので、今日の復習と明日の予習をしっかりとやっておいってくださいね。」

「」「」ありがとうございます。「」「」

「やっと、おわったー」

私の名前はエリア。魔法族の里にある、魔法学校の精霊術科の二年生。

ちなみに、精霊術っていうのは、自分に対応する属性をもつ精霊と、力を合わせて使う魔法なんだ。

それで今、ドリアード先生の精霊術の授業が終わったところなんだ。まあ、精霊術の授業といっても、今日は魔法の歴史の講義だったん

だけどね。

「おーい、エリア、このあと、わたしの家で、遊ぼーぜ。」

「うん、いいよ。なにして遊ぶ?」

この、強気そうな子がヒータ。対応属性炎なんだ。あつ、そうそう、言い忘れてたけど、わたしの対応属性は水だよ。

「おいおい、おまえら、明日は試験だつてのに、いきなり遊ぶのかよ。ちゃんと勉強よ」「おにーちゃん。かえったら、いつしよにあそぼーよ。」

「つて、おまえもかよ、ライナ。」

あと、先に話しかけてきた、ちょっとクールそうなのがダルクくん。それで、後からでてきた天然そうなのが、ダルクくんの妹のライナちゃん。ちなみに対応属性は、ダルクくんが闇で、ライナちゃんが光だよ。

「はあく、お前ら本当にすこしは勉強しろよ。」

ふふ、でたでた、ダルクくんのお節介。

「えー、面倒くさいじゃん。」

「そうそうそくだよお兄ちゃん。」

「面倒くさいって、お前ら…」

あはは、ダルクくんも大変だなあ

「あ…あの、私もダルクくんの言うとおり、勉強はしておいたほうが、いいと思うんですけど。」

「私も同意見ですね。」

この、おとなしそうな子がウィンちゃん、あとに出てきた真面目そうなのが、アウスちゃん。対応属性は、ウィンちゃんが風で、アウスちゃんが地だよ。

「なんだよ、ウィンもアウスもダルクの味方がよ。」

「そ、そうじゃないよ。だって…もし、明日の試験で不合格になっちゃったら、追試とかで、しばらく一緒に遊べなくなっちゃうですよ。」

「あ…そっか。」

む、追試か。それはこまるな。うーん？

「そっだ!」

「どうしたの？エリアおねえちゃん?」「このあと、私の家で、勉強しようよ。」

「それは、いいですね。みんななら、分からない所も教えあえますし。」

他のみんなもOKみたい。

「よし。そうと決まったら、はやく帰ろうみんな。」

私は、この楽しくて平和な日常ずっと続けようと思ってたんだ。そう、この時までには。

第一話『日常』（後書き）

やはり、駄文なっちゃった
すみません。

誤字、脱字の報告、感想や質問、
アドバイス等、ございましたら、
どうぞお願いします。

第二話『崩壊』（前書き）

遅くなりましたが、第二話です。相変わらずの駄文ですが精一杯頑張りましたので暖かい目で見守っていただけると幸いです。

第二話『崩壊』

「よし。じゃあ行こっか」

私がみんなと教室を出ようとしたら、

「あなただれですか？私に何のようですか？離してください。」

ドリアード先生？一体どうしたのかな？

私がそんなことを考えていると急にヒータが走り出していた。

「どうしたのヒータ！」

「みんな何やってんだ。あれは絶対ただ事じゃなかっただろ、早く行くぞ。」

その言葉にみんなは、我に振り返り出した。

ドリアード先生、無事でいてください。

さっきドリアード先生の声のした方に向かうと、そこには長い白髪を床近くまで伸ばした長身の男がドリアード先生を担いでいた。

「ドリアード先生！！！」

返事はない。どうやら気絶しているようだった。

「ん？君達はここの生徒か？悪いがこのドリアードと言う女性は連れて行かせてもらう。」

「そんな事はさせない!」

私は杖を構えて男の懐へ飛び込もうとしたが、

「き、消えた?」

男はなにかをつぶやき、それを合図にしたかのように突然虚空へと消えてしまった。

「ドリアドせんせええええ!!」

私の叫びはただ校舎に響き渡るだけだった。

この呼び声に答えてくれるただ一人の人は、もう……ここにはいなかった。

第二話『崩壊』（後書き）

今回から、あとがきでは作品内の登場キャラとの対談をしたいと思います。ご了承ください。

疾風「今回の対談のゲストはこの作品の主人公のエリアちゃんです。」

エリア「みんなこんにちはエリアです。」

疾「こんにちははエリアちゃん。では、今作品に対して思うところをお願いします。」

エ「じゃあ、えーと、あんまりおもしろくないですね。」

疾「えっちょっとそんなにはつきり?」

エ「あと、今回の第二話短すぎない?」

疾「そ、それはわかってるんだけどさ、もう投稿しちゃったし…」

エ「あと、この作品を友達に見せた時いろいろ言われてたよね。」

疾「うっ」

エ「厨二だな。とか」

疾「ぐはあ」

エ「句点多くて読みづらいよ。とか」

疾「……………」

エ「あとは……てっ、どうしたの疾風くん？」

疾「いいよ。いいよーだ。どうせここまで読んでくれる人は少ないだろうしさ。自分でもあまりおもしろくないと思うけどさ。そこまではつきりいわなくても……」

エ「あちゃー、ちょっといじわるしすぎちゃったかな？まあ、いいか。みんなここまで読んでくれてありがとう。次回もお楽しみに。」

疾「お楽しみに。」

第三話『旅立ちと出会い』（前書き）

まず、皆様に謝りたいと思います。

こんな駄文の作成に約2ヶ月もかかってすみませんでした。

今回も文章構成や流れがめちゃくちゃかと思われます。すみません。

では、第3話の始まりです。

第三話『旅立ちと出会い』

そのあと私達は最初の予定どおり勉強会をしていた。

何故って？多分私もみんなも心のどこかで明日になれば先生は帰ってきて試験が行われるって思ってたからかな。

「うっっ、ひっく、ドリアドせんせえ。」

とうとう我慢出来なかったのが、ライナちゃんが泣き出してしまった。

「ライナ……」

みんなの勉強をする手は止まっていた。すすり泣くライナちゃんの声とそれを慰めようと頭をなでているダルクくん以外は完全に沈黙していた。

「だあーもうやめだやめ。何みんな死んだように落ち込みやがって、別に先生が死んじまった訳じゃないだろう。」

「で、でもヒータ。先生がもう二度と帰ってこないかもしれないんだよ。」

「なんだウインそんな事、簡単なことじゃねえかよ。私達で先生を

助けにいけないじゃねーか。」

ヒータ、無理だよ。

他のみんなもそう思ったらしくヒータに賛成する声はあがらなかった。

「なんだよみんな無理だっていうのかよ。やってみなきゃ分からないだろ。」

「ヒータ、一つ言わせていただきますがあの男はドリアド先生をたおしたのですよ？そんな人に私達が勝てるんですか？」

「そ、それは…」

はあ…アウスの言うとうりあの男はドリアド先生を気絶させて連れていった。私達がかなうわけない。そんな事を考えていたら自分の開いていた魔道書の項目が目にとまった。

憑依装着…

「あつた…あつたよみんな。あの男に勝つ方法が。」

「ほんと、エリアおねえちゃん！」

「うん。憑依装着をすればいいんだよ。」

「ちよつと待ってください。たしかに憑依装着をしてみんなで戦えば勝機はあるかもしれませんが。しかし私達はまだ卒業をしていませんから精霊と契約していませんよ。仮契約しているあの子達がいれば別ですが、あの子達は試験の日でもなければ……………あ」

どうやらアウスもきずいたみたいだね。

「そう。明日は試験をやる予定だった。だからあの子達も来てるはず。」

私の言葉にみんなは納得したように頷いていた。ただ一人をのぞいて

「盛り上がってるころわるいんだけどさ。あの男に対抗できる力があつたとしても、俺達はあの男のことを全く知らない。どこにどうやって先生を助けに行くんだ？」

その私達の希望を打ち砕く、覆しようのない正論に、私達はまたふさぎこんでしまった。

そうだね。いくら力があつても方法がないんじゃないか……………

「あ、あの……………」

ウィンがおずおずと手を挙げた。

「もしかすると、その問題も解決できるかも」

私は叫びたくなりそうなのを必死に抑え、落ち着いて聞いた。

「ウイン。詳しく説明してくれる？」

「うん。実は昔ドリアド先生に聞いたんだけど、ここから東の方にある倭ノ国の王様とドリアド先生は古い友達らしいの。」

「なるほど、たしかに倭ノ国なら先生をさらった男の情報も手に入るができるかもしれませぬね。」

私はその言葉が信じられなかった。何故なら和ノ国ほど情報収集力の高い所は存在しないからだ。

「ねえお兄ちゃん。倭ノ国ってどんなところ？」

「ああ、倭ノ国ってのはな人間達の国なんだ。人間ってのは俺達みたいに生まれもった特殊な力はないが遥かに進んだ技術力を持っているんだ。」

「ふーん。じゃあなんでその国の王様と先生がお友達だと、先生をさらった男の人の事がわかるの？」

「それはな、倭ノ国はその高い技術力と人数を生かして、世界中の情報を集めてその情報を元に国を動かしてるんだ。つまり、先生と国王が友人ということとは、俺達が聞きに行けば情報提供してくれる可能性が高いつてわけだ。」

私はそれを聞いてもついてもたつてもいらなかった。

「すごい！これなら先生を助けにいける。ヒータ、私も行くよ！」

「よし、よく言ったエリア。私とエリアはいくからな。みんなはどうする？」

「わたしも行くよ。だってわたしドリアド先生が大好きだもん。」

ライナちゃん…

「ライナがいなくなったら俺も行くぜ。妹が行くのに俺が行かなくてどうする？そもそもただ待ってるだけってのは俺の性に合わないしな。」

ダルクくん…

「わ、私もドリアド先生を助きたい。」

「私も同感です。成功率が0でないならやってみるかちはあります。」

ウィン…アウス…

「みんなありがとう。じゃあまずあの子供を迎えに行こう。」

「アクア！久しぶり元気だった？」

この子は私のパートナーのギゴバイトのアクア。パートナーとは言ってもまだ正式な契約をしてるわけじゃないんだけどね。ちなみに契約って言うのは、私達霊使いと一緒に戦う精霊との間に交わすものなんだけど、私達はまだ学校を卒業してないからまだこの子達とは仮契約ってわけ。

あ、そうそう。他のみんなの精霊も紹介すると、

アウスのパートナー、デーモンビーバーの『グラン』

ヒータのパートナー、きつね火の『フレイ』

ウインのパートナー、プチリュウの『エアロ』

ダルクくんのパートナー、D・ナポレオンの『ブライ』

ライナちゃんのパートナー、ハッピー・ラヴァーの『シエイン』

みんな優しくて頼もしい私達のパートナーだよ。

「じゃあみんな。アクア達も見つけたし倭ノ国に行こう。」

その後私達は、各自準備を整えて倭ノ国にむかって旅立ったのだった。

「す…すごい。これ本当に湖なの？」

私達はあのあと、ウインの魔法で倭ノ国のある湖のほとりまで飛んできたのだけど…その湖はとても大きく水平線しか見えなかった。

「ねえねえウインおねえちゃん。倭ノ国ってどこにあるの？」

「うん、先生がいうにはこの湖のちょうど真ん中あたりにある大きな島が倭ノ国みたい。」

「え？つまり水平線がみえてるって事はまだここから半分も見えてないってこと？」

「うん、でもそれだけじゃないみたいなの。この湖の一带には倭ノ国の人達がつくった結界が張ってあって倭ノ国の人以外は許可無しじゃ入れないみたい。」

「おいおい、それじゃあ俺達はどやって倭ノ国に行けばいいんだ？そこら辺のこともちゃんとわかってんのか？ウイン？」

「そ、それは…」

「お、おいウイン？まさかここまで来ておいて私達全員この先に行

けないなんてこと無いよな？」

「ヒータ…ごめん」

「そんな…せっかく先生を助けられると思ったのにこんなところでおわるの……………いやだ。私は絶対に先生を助ける！」

私は結界がある方向に水の魔法を放った…しかし、結界が壊れる事はなく魔法は跳ね返り自分に直撃した。

「うっ、くっ」

「エリアおねえちゃん!？」

今度は結界に向かって体当たりをした。体が跳ね返され地面に強く叩きつけられる。全身に痛みがはしたがまた体当たりをしようとした。

「エリア!もうやめてください。そんなことをしたらあなたの体がもちませんよ」

アウスが私を羽交い締めにする。

「離してよ!私は、私は先生を助けるの!こんなところで…あきらめ…たくない……………うっうっ……………」

「エリア……………」

私は崩れ落ちて泣いてしまった。

すると湖とは反対の森の方から誰かが近づいてきた。

「そこに誰かおるんか?…ん?なんや自分ら、ワイらの国にようでもあんのか?…って、おわ!どないしたんや?なんで泣いとんねん?」

崩れかけていた私達の心は…一筋の希望と出会った…

第三話『旅立ちと出会い』（後書き）

疾風「どうもみなさん神風 疾風です。」

アウス「アウスです。よろしくお願いします。」

疾「えー、もうわかりだとは思われますが今回はアウスちゃんにきていただきました。」

今回、アウスちゃんにやって頂くのは作中ではかけなかった作中の世界構成を解説してもらいます。ではアウスちゃんよろしく。」

ア「まず、この作品の中での私達は精霊ではなく実際に存在すると考えてください。そして、私達モンスターは基本的にカテゴリーごとに分かれて暮らしています。ライトロードはライトロード、剣闘獣は剣闘獣といったようにです。もう作中で出ていますが人間も一つのカテゴリーとして私達と同じ世界に住んでいることになっています。」

とまあ、私達の世界に関してはこんなところです。」

疾「うん、ありがとうアウスちゃん。」

ア「あ、あのすみませんがあまりちゃんづけにはなれてないのでできれば別の呼び方がいいのですが…」

疾「あっそうか、基本的にライナちゃんぐらいしかちゃんづけにしないから恥ずかしいんだ。アウスちゃんのそういうところかわいいと思っよ。」

ア「／／／か、かわいいなんて、そんなことありません！／／／」

疾「そうかな？」

ア「／／／／／そうです！も、もうこの話は終わりです。／／／／」

疾「わかったわかった。ではみなさん、感想やアドバイス、内容に
関して解説してほしいことなどがございましたらどしどしお寄せく
ださい。」

疾「では第4話を」

疾・ア「「お楽しみに」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5062n/>

6人の霊使い

2011年9月16日22時35分発行